

調査結果の概要

■ 平成29年度の成果

- 気候条件の異なる鳥取県（日本海側）、山口県（瀬戸内側）、高知県（太平洋側）に観測地を設置してナシ6品種の栽培個体及び栽培地点の気温を観測し、自発休眠打破※1に必要な低温要求量※2を算出するための基礎データを得た。
- 既存のモデル及び気候データを用いて、3県における現在及び1～3℃上昇時の栽培適地を予測した。

■ 明らかとなった課題

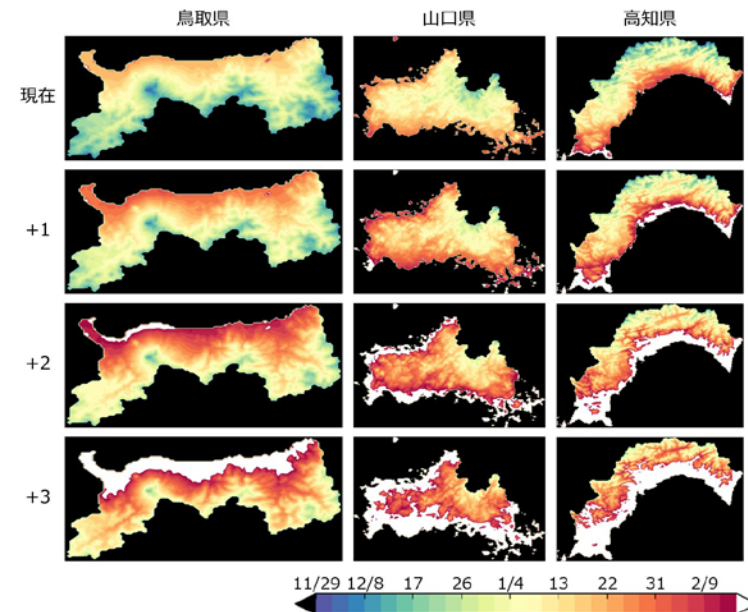
- 例年に比べて秋から初冬の天候不順が特異であったため、観測の継続と影響の把握が必要
- 品種により、観測値に基づく低温要求量が既往知見の値と大きく異なっていたため、要因の検証が必要

■ 平成30年度の調査計画

- 観測データを整理して既存モデルを改良する。
- 中国四国地域における現在及び将来の栽培適地の予測を試行する。
- モデルの精度向上につなげるため、栽培個体及び気象の観測を継続する。



観測地で採集した枝の観測状況
(鳥取大学内で撮影)



既存モデルによるナシ（‘新高’など）の自発休眠打破日の予測結果（鳥取大学作成）

※1 自発休眠打破：ナシが展葉・開花するためには冬の間には十分な低温に曝されることが必要で、品種によってその時間に差がある。

自発休眠打破とは、十分な低温時間を経験し、展葉・開花が可能な状態となることをいう。

※2 低温要求量：ナシの自発休眠打破に必要な低温の積算量（5℃以下の低温の積算時間）